

# イギリス英語の背景

—イギリス人の暮らし（その2）—\*

浅 田 <sup>ひさ</sup> 壽 <sup>お</sup> 男

## I はじめに

本稿に先立つ拙稿（近刊）の冒頭でも記したように、「言葉の背景にあるものを見ることは、言葉の理解を何より深めさせてくれる」という観点から、本稿は、イギリス英語のより一層の理解のために、英国 Nottingham に滞在した半年間の日常生活<sup>1)</sup>で得た体験や知見をまとめたものである。個人の体験という限界や偏りは避けられないとしても、書物の上の限られた知識や巷間の情報を補完したいという目的でまとめた拙稿（近刊）の続編である。すでにこの種の文献には定評のあるものもあるが、残念ながらイギリスの身近な風物地誌やイギリス人の普段の日常生活を手取るようにうかがわせるものは、ほとんど見当たらず、少なくともこれまでの文献や巷間の情報を補う意味で、本稿もいささかなりの意義はあろうと思う。

## II イギリス人の暮らし

### 1. イギリス人と花火

一般のイメージとして、日本では花火は古くから夏の風物詩であり、また諸外国でも、火薬を発明した中国では、正月などの多くの行事が花火や爆竹で盛大に祝われることは周知の通りであるが、イギリス人と花火となると、すぐには結びつかないように思われる。筆者は首都ロンドンから鉄道で2時間ばかり北上したところにある Nottingham で、郊外にほど近い Arnold という由緒ある住宅街の一角に居を構え、2005年9月から2006年3月までの半年間を暮らしたが、首都ロンドンの様子はともかく、少なくともイギリス中東部最大の都市、ここ Nottingham の街中では、10月31日のハロウィーン（Halloween）の数日前からぼつぼつ始まり、11月5日のガイ・フォークス・デイ（Guy Fawkes' Day）の翌

\*本稿は拙稿（近刊）の続編である。なお、本文中に掲載の写真はいずれも筆者自身が撮影したものであり、また写真3、4、13、14、16、21は、同じく筆者撮影の動画から取り出した静止画である。

1) 本学の学院留学制度による支援を受けて、2005年9月20日から2006年3月23日までの半年間、ノッティンガム大学英語学部（School of English Studies, The University of Nottingham, University Park, Nottingham NG7 2RD, UK）の客員研究員として、イギリス中東部の Nottingham 市で暮らす機会を得た。なお、そこでの研究内容や成果については、別途、すでに『2005年度研究成果報告』2006年12月15日、関西学院大学研究支援課発行、pp.13-15で公表した。

日辺りまで、日本の夏祭りで見られるような本格的な打ち上げ花火が、それも、住宅街のあちこちに点在するちょっとした広場から、またほとんどの一般家庭の庭という庭から打ち上げられる。夜空を色とりどりに飾る大きな花火に見とれるというより、まさに戦時中の夜間空襲を思わせるような、深夜までひっきりなしに続く閃光と爆音の連続に、ただただ圧倒されるばかりである。



写真1：議事堂前を行くトラム（路面電車）



写真2：Nottingham 市の中心街風景

ガイ・フォークス・デいの当夜には、Nottingham City Bonfire Night と称して、Goose Fair (グース・フェア)<sup>2)</sup> の会場にもなる大公園 Forest Park Recreation Ground で、テレビやラジオの放送局も特設会場を設営し、様々なイベントと並行して、Fire and Light と称する大がかりな打ち上げ花火大会が催され、おそらくは1万人を越える家族連れの観客が集まり、夜空を明るく彩る花火を楽しむ。季節は違うが、日本の夏祭りや納涼大会で、「玉屋！鍵屋！」と声を張り上げて花火を鑑賞する日本人と全く変わらない。このガイ・フォークス・デいが終わった後も、再び大晦日の夜、夕刻から明け方まで、各家庭の庭から、さらにまたあちこちの広場から、盛大に祝賀の花火が打ち上げられる。



写真3：Bonfire Night の打ち上げ花火



写真4：同左

2) 今を去ること700年以上も昔、少なくとも文献で確認できる限りイギリス国王 Edward I 世の時代の1284年から、毎年一度、ここ Nottingham で開かれるヨーロッパ最大の移動遊園地 (fun fair、米語では amusement park) のことで、中世の時代から街の中心 City Centre で開かれていたが、1928年に現在の Forest Park Recreation Ground に会場を移して現在に至っている。この「グース・フェア」については、近日中に稿を改めて論じたい。

初めて Nottingham 入りした 9 月下旬は、あいにく大学の新学期の始業時と重なって、あてにしていた大学の Accommodation Office が新入生の対応に追われて、やむなく家探しに奔走したが、たまたま家探しのために約 10 日間を予約し、滞在した B & B が Arnold Town Centre に近かったのも、それも偶然、Arnold に借家が見つかる前に、すでにこの繁華街を何度も行き来した。この時、商店街に並ぶ店の一つが「花火」(Fire Works) の看板を店先に掲げてあるのに気づき、なぜイギリスで、しかも一年中、花火を売る店があるのか、不思議に思ったが、ハロウィーンが近づいた頃に、これほど町中くまなく、至る所から打ち上げ花火が上げられることを知って初めて、常時、花火を売る店がある理由が納得できた。



写真 5 : Nottingham 城の Robin Hood 像



写真 6 : 遠征する十字軍が立ち寄ったという  
イングランド最古の歴史あるパブ  
Ye Olde Trip to Jerusalem



写真 7 : Nottingham 大学の時計台



写真 8 : 大学構内の D. H. ロレンス像

ここ Nottingham では、この他にも大々的な花火大会が催される恒例行事として、毎年 8 月 1 日から 3 日まで、川縁の町 Victoria Embankment で開催される Riverside Festival があるが、筆者の滞在期間外であったので、残念ながら見ていない。

## 2. ハロウィーン

キリスト教の祭りの一つ「万聖節」(11月1日)の前夜祭をハロウィーン (Halloween) と言い、All Hallows Even (hallow はアングロ・サクソン語で saint [聖徒] の意味である) が短縮されて Halloween<sup>3)</sup> となった。このハロウィーンの頃のイギリスは16時過ぎには日が傾き、16時半には日が完全に沈む<sup>4)</sup>ので、この頃から玄関先に飾った Jack-o'-lantern (カボチャの提灯)<sup>5)</sup> に灯をともし、玄関の遮光カーテンを開いて玄関先を明るくして待っていると、次々と近所の子供達がやって来ては呼び鈴を押し、こちらが顔を出すと、口々に “Trick or treat !” (お菓子を頂戴。くれないとイタズラするよ) と大声を上げて、お菓子をねだる。

このハロウィーンで感心したことは、実際には保育園児、幼稚園児から小学校低学年くらいの小さな子供だけが楽しむお祭りだと思っていたが、予想に反し、ほとんど大人と言ってよいような中学生くらいの子供達も、全く照れないで大勢で参加し、思う存分、ハロウィーンを楽しんでいることであった。写真11~12を参照。

実は、1983年夏から1年余、家内と当時3歳の長女を伴い、米国カリフォルニア州で暮らした時<sup>6)</sup>にもハロウィーンを経験したが、長女が通った Bancroft Nursery School<sup>7)</sup> の同級生や、同じアパートに暮らす家族の小さな子供が、母親に手を引かれて2、3人、お菓子をねだりに来ただけだったので、今回の Nottingham でのハロウィーンも、訪れる子供はあまりいないだろうと予想していた。ただ、それでも万が一を考えて、あらかじめ近所のスーパー、ASDA (アズダ) や Sainsbury's (サンズベリー) でキャンディーやチョコレートの大入り袋を買い込み、それを数個ずつ小袋に小分けして、プレゼントのお菓子を30袋ほど用意していたが、全く予想外にも、次々とひっきりなしに大勢の子供達がやって来たので、あっという間に、プレゼントするお菓子が尽きてしまった。もっと沢山お菓子を用意しておけばよかったと残念に思いながら、家内と玄関先に吊した Jack-o'-lantern の灯を消し、玄関ドアのカーテンを引いて、夜20時頃には玄関先を暗くして店じまいをした。こうしておけば、子供達は訪れて来ないのだが、その後も遅くまで、家の表で大勢の

3) 安東伸介他編 (1982: 284-285) を参照。

4) イギリスでは夏の日照時間が長く、冬が短いので、サマータイム制度を導入しており、3月の最終日曜から10月の最終土曜まで時計を1時間進めている。したがって、11月1日の16時は、10月の最終土曜までの17時に相当する。

5) 1983年に米国で迎えたハロウィーンでは、同伴した長女も喜ぶので本物のカボチャを細工して提灯を作ったが、今回のハロウィーンではカボチャを細工するのが面倒になり、近所のスーパー、Wilkinson で売っていた電池で灯がともるプラスチック製のカボチャ提灯を買ってきて、自宅の玄関先に飾った。本文中に掲載の写真9を参照。

6) 1983年8月から1984年8月まで、前任校の北九州大学 (現、北九州市立大学) の留学規定による支援を受けて、米国カリフォルニア大学バークレー校 (University of California at Berkeley) に客員研究員として滞在した。

7) カリフォルニア大学バークレー校に隣接し、主に大学の関係者の子が通う幼稚園。当時、学内には全学部合わせると、日本から約50名の研究者が滞在していた (その大半は NEC などの企業の研究員のほか、電子工学関係の理工系の研究者であった) が、この幼稚園に通う日本人の子供は、筆者の長女以外には一人しかいなかった。

子供達が行き来する気配がしていて、とても気になった。



写真9：自宅玄関に吊したカボチャ提灯



写真10：訪ねて来たお向かいの幼児姉妹と家内



写真11：訪ねて来た近所の男の子達



写真12：訪ねて来た近所の女の子達と家内

ともかく、お祭りの盛り上がりの程度には地域差もあるだろうが、先述の通り、ほとんど大人と言ってよいような大きな子供達もこのような伝統的行事に積極的に参加し、楽しんでいる姿を見ると、この一事をもってしても漠然とではあるが、イギリス人が歴史と伝統を重んじ、古くからの風習を大切に守っていく国民であることを改めて痛感させられ、また、子供達が大きくなってもこのような行事や祭りに、照れずに積極的に参加し、大いに楽しむという、今の日本人が失っている素朴さ・純朴さといったものを、今もイギリス人はしっかりと堅持している様子を垣間見たようで、大いに感銘を受けた。

### 3. ガイ・フォックス・デイ (Guy Fawkes' Day)

毎年11月5日の夜は、1605年の英国の「火薬陰謀事件」(Gun Powder Plot) が11月5日の国会議事堂爆破実行予定日を前に陰謀が発覚し、主犯のガイ・フォックス (Guy Fawkes) が逮捕され、未然に事件が防がれたことに感謝し、これを記念して、昔はガイ・フォックスの人形を作り、町中を引き回した後に焼き捨てたようであるが<sup>8)</sup>、今は他の祝賀の行事と同じく、各地で花火を打ち上げ、また広場で大きなかがり火に火をつけて祝っ

8) 安東伸介他編 (1982: 285-286) を参照。

ている。このため、所によってはこの記念日を Bonfire Night（大かがり火の夜）と呼んだり、Cracker Night（爆竹の夜）と呼んだり、Fireworks Night（花火の夜）と呼んだりする。

ここ Nottingham では市の企画する年中行事の一つとして、すでにⅡ．1「イギリス人と花火」の項目で述べたように、11月5日の夜を Nottingham City Bonfire Night と称し、巨大な移動遊園地 Goose Fair を始めとして各種のイベント会場に供される Forest Park Recreation Ground で、Goose Fair ほど大きくはないが Fun fair（遊園地）を仮設し（移動遊園地）、昼から子供達を遊ばせたり、夕方からはラジオやテレビの放送局が特設会場を作り、市民参加のイベントを催して、完全に日が落ちると、広場に設けた大かがり火に火を点し、その後に大規模な打ち上げ花火大会 Fire and Light が始まる。



写真13：Bonfire Night の Fun fair



写真14：Bonfire Night での放送局主催のイベント



写真15：Nottingham の Goose Fair



写真16：同左

もちろん、Nottingham 市が企画するこの Nottingham City Bonfire Night とは別に、この日の前後数日間にわたり、毎夜、各家庭や仲間内で、自宅の庭や町のあちこちから、家庭で扱う花火とは思えないほど大がかりな花火を打ち上げる。この頃に、暗くなってからバスに乗っていると、町のあちこちから大きな爆竹の音がバスの車内にまで響いてくるし、色とりどりの花火が窓越しに見え、真っ黒な暗い夜空をストロボのように明るくする。急に曇ることも多いけれど、晩秋から初冬の英国の空は日本の、特に都会の空とは比べものにならないほど抜けるように澄みわたり、夜空は完全に真っ黒なので、一層、打ち上げ花

火が映える。

#### 4. クリスマス

ハロウィーンやガイ・フォークス・デイが終わると、いよいよクリスマス・シーズンを迎え、町中にはクリスマスの飾り付けが始まり、また住宅街の各家庭でもリビング・ルームにクリスマス・ツリーを飾ったり、また結構、多くの家庭では庭先の樅の木に直接、クリスマスの飾り付けをしたり、電飾で華やかに飾り立てる。この頃から町の商店街はクリスマス商戦で一層、賑やかになるのは、日本と同じである。



写真17：クリスマス・シーズンの Nottingham  
市中心街



写真18：同左

しかし、日本と大きく異なるのは、クリスマス当日である。日用の雑貨・食料品を扱うスーパーの ASDA や Sainsbury's でさえ完全に休店となり、商店街や繁華街は全ての店がシャッターを降ろし、人通りが絶えてしまう。昨日まで人通りの絶えなかった Arnold Town Centre も、突然、ゴースト・タウンのような様相を呈する。少し足りない物を買に行こうにも店が閉まっている。第一、Nottingham 中くまなく走っているバスやトラムといった公共の交通機関が全面運休となるので、自家用車でも無いかぎり、身動き一つ取れない。そもそもクリスマスの日は、自分の家で家族と一緒にクリスマスを祝い、静かに過ごすのだから、外出する人はいないのだが。



写真19：静まりかえったクリスマス当日の  
Arnold Town Centre



写真20：普段の Arnold Town Centre

とにかく、クリスマス・イブの日はバスやトラムが休日運転となりその数が激減し、クリスマス当日とその翌日、12月26日のボクシング・デイ<sup>9)</sup>には全面運休となるので、静かに自分の家で過ごすしか選択肢がない。

## 5. 正月

日本のように三箇日を祝う風習はないが、やはり元旦 (New Year's Day) は新しい年の始めとして、しっかりと祝われる。外国人の筆者には、雰囲気として、クリスマスの延長として、クリスマス・シーズンの終わりを締め括るような感じである。日本とは違い、1月の最初の1週間辺りまで各家庭のリビングや庭先のクリスマス・ツリーやクリスマスの飾り付け、それに電飾は、新年1月を迎えても、そのまま飾られている。実は、この理由は、そもそも英国では12月24日のクリスマス・イブから新年1月6日の Epiphany (救世主御公現の祝日) まだが Christmastide (クリスマス季節)<sup>10)</sup> とされているからである。



写真21：クリスマスの飾り付けがそのままの住宅街の元旦の夜



写真22：クリスマスに現れたコーヒークップの乗り物が1月3日だけ Town Centre に再登場

また大晦日の12月31日には、新年を迎える1, 2時間前から、ガイ・フォークス・デイと同じように、町のあちこちから物凄い打ち上げ花火が始まる。

バスやトラムも、元旦は全面運休であることはもちろん、大晦日を挟んで12月27日辺りから新年1月3日辺りまで休日運転となり、動きにくい。商店街や町中の店も年末から1月3日くらいまで完全に閉店という所が多く、3日辺りからぼつぼつ店が開く。ただし、ASDA や Sainsbury's のような大手のスーパー、それに Marks & Spencer のようなデパートは、元旦以外、しっかり営業しているので助かった。なお余談ながら、ゴミの収集は、早々と新年1月3日には始まった。

9) 「クリスマスの祝儀の日」のことで、英国では国の休日の一つである。昔この日に、使用人や郵便配達夫などに日頃の感謝を込めて祝儀を贈る習慣があった。安東伸介他編 (1982: 290) を参照。

10) 上山泰・井上澄子 (1993: 211)、ならびに安東伸介他編 (1982: 287) を参照。



## 6. イギリス人の挨拶（その1）：hello と hi

アメリカ英語とイギリス英語が混交し、次第に両者の差がなくなりつつあることは言うまでもないが、それでも普段の言葉遣いの中にはイギリス英語独特の表現が現れて、はっとすることも少なからずある。人と人が出会って挨拶をする時の hello も、その一つである。アメリカ英語では親しい人に対して気さくに「やあ」と挨拶をする時に使われる hi も、まず英国ではめったに使われない。どんなに親しくなっても、例えば町中でばったり出会った時にまず相手が言う言葉は hello である。イギリス英語の会話表現を教える実用書の中には hello と同義語として hi を並べているものもあるが<sup>11)</sup>、少なくとも筆者の滞在中に、生活の場となった Nottingham でも、また度々訪れた London でも、旅をして回ったどの地方でも、地元の人が hi と挨拶するのは聞いたことがなかった。



写真23：2 Upminster Drive, Arnold, Nottingham, NG5 8DT, UK の借家自宅



写真24：雪の日の自宅裏庭



写真25：詩人 Byron とその一族が眠る St. Mary Magdalene 教会



写真26：Robin Hood と仲間が隠れ家にしたという Sherwood の森の Oak Tree

ちなみに、この Nottingham で暮らした日々の経験の一つに、親しくなったイギリス人に対して、家内がアメリカ英語の hi を使って挨拶した時、相手は hi を使わずに hello と挨拶して返したことが何度かあった。確かに hi は言いやすいし、日本人の（特に若者の）挨拶の定番にもなっているが、このような経験を何度かしたので、家内には「イギリス

11) カール R. トゥーヒグ著『CD BOOK イギリス日常英会話 Total Book』p. 10など。

では hi と言わないで hello と挨拶した方がいい」と注意したことを思い出す。



写真27：詩人 Byron とその一族が代々暮らした館 Newstead Abbey の庭で



写真28：Trent 川に臨む Newark 城

同様のことは小寺（1986：303-304）も指摘しており、イギリス人が挨拶に hi を使わないことを指摘すると共に、LDCE の“*esp. BrE HEY*”の記述<sup>12)</sup>を引用して、「イギリスでは使われないと断言はできないが、少なくとも hey という言葉を連想させるので、あまり上品な言葉とは考えられていないのかもしれない」と述べている。この点について筆者は異なる意見を持っていて、hey を連想させるというよりも、hi が hey のように「ねえ」とか「ちょっと」という呼びかけ語として使われているから、英国では「こんにちは」といった挨拶には使われないと考えているが、いずれにせよ、単にこのような挨拶を比較するだけでも、イギリス英語とアメリカ英語の違いが明確にあることがわかる。

## 7. イギリス人の挨拶（その2）お礼の表現：cheers と ta

手元の *Cobuild 4* などには「主としてイギリス英語」（mainly BRIT）とあるが、cheers が、イギリス英語でもアメリカ英語でも、おそらくは万国共通の乾杯の音頭であることは下記の *Longman Guide* の記述の通りである。

In both British and American English, *cheers* is the practically universal toast before dinking. — *ibid.*

ただイギリス英語では、アメリカ英語と異なり、この cheers はお礼の言葉にも、また別れの挨拶にも使われる万能の表現である。

For many British speakers it is an all-purpose word used as a form of thanks, as a farewell, and even as an apology. — *ibid.*

12) ちなみに、手元の LDCE 4 では、すでにこの記述は削除されて無くなっている。

例えば、いつも利用するバスで、料金を払って降り際に、バスの運転手に一言「ありがとう」と声をかける時に、米国では“Thanks.”とか“Thanks a lot.”と言うところ、英国ではよく“Cheers.”と言い、運転手もたいてい“Cheers.”と挨拶をして返す。ただし、cheersがお礼の意味にも別れの挨拶の意味にも使われるので、cheersを使うと“Thanks.”とお礼を言っているのか、“Bye.”と別れの挨拶を言っているのか、その区別はコンテキスト任せになってしまう。

このお礼の意味の cheers は、London のバスの乗り降りの時にはほとんど聞かなかったが、地元の Nottingham では、大学に毎日通うバスの車内で注意していると、大学の最寄りのバス停で学生達がバスを降りる際、運転手に“Cheers.”とお礼を言って降りる光景に毎日出会った。筆者自身は、このような場面で cheers を使うことに不慣れで、何となく抵抗を感じて、“Thank you.”とか“Thank you very much.”などと普通にお礼を言っていた。

またこの他に、日本でも下町の商売人や市場の店員が「毎度ありがとうございます」を略して「毎度ありー」と言ったり、関西で「大きにありがとう」を略して「おおきに」とお礼を言うように、英国にもイギリス英語独特のお礼の言葉として“Thanks.”を略した“Ta.”がある。

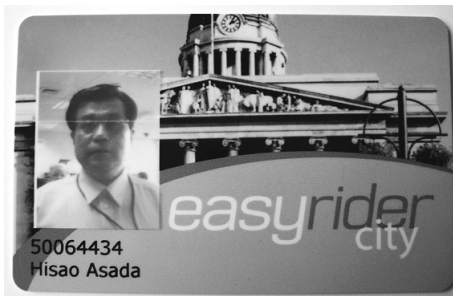


写真29：市内のバスとトラムが乗り放題の  
定期券 Easy Rider



写真30：Nottingham 大学の構内を路線として  
走る市バス



写真31：Double-Decker（2階建てバス）は London  
だけの名物ではなく、英国各地に見られ、Nottingham にも数多く走っている



写真32：キャンパス移動用の Nottingham 大学  
専用バスが構内に停車中

手元の *LDCE 4* などには「くだけた表現」(*BrE informal*) とあるが、*OALD 7* には「イギリスのスラング」(*BrE, slang*) と明記されているように、ずいぶんくだけた表現なので、逆にめったにお目にかかれない。以前、ある知人から、家の使用人のような庭師がこの *ta* を頻繁に使っていたと聞いたが、筆者自身は、地元の Nottingham ではこの表現に出くわした記憶がなく、London のバスの運転手が乗車するお客 (Nottingham とは異なって、乗車時に料金を払う) に対して、たまに “Ta.” と言っているのを聞いたことがある。

### Ⅲ むすびに

以上、拙稿 (近刊) の続編として本稿は、言葉の背景を見ることによってイギリス英語を一層よく理解するために、英国 Nottingham での体験や知見に基づいて、イギリス人の暮らしに関わるトピックをいくつか、許された紙幅の中で取り上げた。従来の限られた知識や巷間の情報を補完することになれば幸いである。もちろん紙幅の都合で、本稿では取り上げるべくして取り上げられなかったことも多いので、今後も機会を捉えて、さらに続編、続々編を公にしたいと考えている。

### 参考文献

- 安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫, (編) 1982. 『イギリスの生活と文化事典』東京: 研究社.  
 浅田壽男, 近刊 (2009年2月予定), 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし—」『西川盛雄先生退官記念論文・随想集』(仮題) 東京: 英宝社.  
 上山泰・井上澄子, 1993. 『イギリス風物誌』東京: 篠崎書林.  
 小寺茂明, 1986. 『英語教育と英語学研究』京都: 山口書店.  
 ミルワード、ピーター (Milward, Peter) (著)、舟川一彦 (訳), 1983. 『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座第11巻) 東京: 大修館.  
 トゥーヒグ、カール R. (Twohig, Karl R.) (著)、近藤大樹 (訳), 2002. 『CD BOOK イギリス日常英会話 Total Book』東京: ベレ出版.

### 辞書

- Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary*. 4th ed. (2003) [*Cobuild 4*]  
*Longman Dictionary of Contemporary English*. (1978) [*LDCE*]  
*Longman Dictionary of Contemporary English*. 4th ed. (2005) [*LDCE 4*]  
*Longman Guide to English Usage*. (1988) [*Longman Guide*]  
*Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 7th ed. (2005) [*OALD 7*]

## Background of the British English

—English Daily Lives ( 2 )—

Hisao ASADA

To understand the background of language, I firmly believe, will eventually be effective in an approach to its grammar and usage. From this point of view, I have argued some aspects of the English daily lives in my paper (forthcoming), based on my personal experience and knowledge gained from my daily life while I was living in Nottingham, U.K., for better understanding of the British English.

From September 2005 to March 2006, with financial support of Kwansei Gakuin University, I lived in Nottingham as a visiting research scholar at the School of English Studies, the University of Nottingham. Nottingham is right in the heart of England, specifically in the East Midlands, less than two hours from London with excellent transport links to the capital and the rest of the U.K.

Fortunately my research on the campus has gone well, and at the same time my daily life there itself has given me many insights into the culture of the England and a large number of things I have never known before.

The present paper is a sequel to my forthcoming paper above, arguing other aspects of the everyday lives including manners and customs of the English. Main topics dealt with here are fireworks in England with special comparison to those in Japan, Halloween, Guy Fawkes' Day, Christmas, New Year's Day, British greeting *hello* with special reference to American *hi*, and British words of gratitude *cheers* and *ta*. These are discussed from another side of them scarcely known here in Japan.

My daily life in Nottingham has not only shown me innumerable real images and actual situations of English daily lives unknown in Japan, but also inspired me to study its background for better understanding of the British English. I really hope the series of my papers will complement insufficient information on the British and will help to understand the British English as well as the real state of lives in England.